

## 教祖生誕200年記念講座「神人の祈り」

第六回 生き続ける願い

平成26(2014)年9月29日

竹部弘(教学研究所)

はじめに

- ・肉体的生命の終わり
- ・明治9年頃から「旧暦と新暦とがあるが、先で両方が九日十日と連れ合っていく時がある。その時には神上がりする」と語っていたという伝え(理解Ⅱ類伍賀慶春21)

### 一、晩年の課題

#### 1 宮の建築

##### \*宮建築の頼みと中断

元治元甲子正月朔日、一つ、お知らせ。金神の宮社、日本になし。宮建ててくれい、と仰せつけられ候。(覚帳8-1-1)

- ・「覚書」では「天地金乃神には、日本に宮社なし、まいり場所もなし」(覚書13-1-1)、「其方の宮」(覚書13-1-5)、「正真、氏子の願い礼場所」(覚書13-1-6)

- ・明治5年に中断。

##### \*宮建築の再開

- ・大谷村の有力者川手家の勧めによって再開
- ・「広前歳書帳」(教祖御祈念帳)によれば年間7千から1万件の願い主を数える
- ・崇敬心と共に、村内の結束や経済的な波及効果まで、様々な期待や思惑
- ・参拝者の中には建築成就を願って献納する者があり、広前の世話方も積極的な気運
- ・建設予定地の売買に絡む問題一宮への願望は人間の欲望と背中あわせ  
→本来の願いに合致しない、というよりも外れていく様相
- ・寄進・勧化のような動きや、無理な借金をしてでも進めようとする動き  
「此方子供の飯の種こしらえてやるのじゃ」(覚帳24-27-5)という氏子の言い分  
→「此方に頼まんこと、はじめだし申し」(覚帳24-27-6)  
→「宮は建たいでも大事ない」(覚帳25—7—2)

## \*村氏子と神の間

氏子は大谷村の金神社と申し。天地金乃神、生神金光大神、日本開き、唐、天竺、おいおい開き。（覚帳 21-27-5～6）

- ・「目先のこと」と「先のため」  
みな目先のこと申し、先のため知らず。此方のは、先のため、おかげを受ける氏子のためになること、末々まで繁盛すること。（覚帳 24-28-2～3）
- ・「宮できんでもかまわん。氏子が助かるがよし。助けてやる」（覚帳 25—8—6）  
結果的に、金光大神在世中に宮は建たず

## \*信仰の行方

- ・金光大神の孫桜丸の死、神からは父菰雄の「身代わり」であったとお知らせ
- ・宮建築の動きをなす人々の心根に向けて  
「氏神のように思えばどこへなりとも宮建て。神と思えば此方地内建てくだされ候」（覚帳 25—21—1）
- ・神の願いに発する宮建築を、神が放棄？  
本来の願いが置き去りにされていくことへの憂いと悲しみ。しかし、本当はそのような人々にこそ、必要な宮であったという奥底の意味
- ・宮が建たなくてもよいという神の言葉は、善悪正邪の判断で割り切ってしまう氏子の助かりへ向けた改めたの願いであり、できるできないよりも大きなものへの信に立脚することを促すものでもある
- ・神の憂いや切なる願いと、願いに沿う手応えや喜びという両面—神と金光大神の一喜一憂

2 健康状態—日付は旧暦で示し、（ ）内に新暦を示した

## \*体調変化

明治 10 年

8 月 3 日 (9/9) 夜から下痢(21—16)

4 日 (9/10) 「毎日手水へ行かなくても良いように、着物も汚れぬように」とお知らせ(21—17)

明治12年

1月26日(2/16)～3月 下痢が続き、痔疾。この間、「毒の取りさばき」「好きな物食べて体の丈夫をつけて、おかげを受け」とお知らせ(23—3～5)

閏3月から4・5・6月と続く(23—6—1～4)。7月20日夜、4度も下り、22日はよし。頭痛・熱(一夜のみ)。

明治14年

8月9日(10/1) 「大神、虫入りた」とお知らせ。下痢、食事進まず(25—24)。

\*明治16年夏、帰幽間近の状態(覚帳27—8・14～15)

6月6日(7/10) 夜から朝まで頭痛・足の痛み。

16日(7/20) 熱が出、食事は午後にところてん1杯。

17日(7/21) 「穀類を食べるな」とお知らせ。

18日(7/22) 「麦をやめても食べよ」とお知らせ。茶・水・砂糖水飲めず。

香類食べず。

19日(7/23) このが買って寄越したあん入りの餅を2つ。

20日(7/24) くらが買って寄越した同様の餅3つ。

21日(7/25) このが寄越した甘酒を茶碗1杯。

24日(7/28) 御飯半膳。この間、広前を休まず。

「ご膳は食べん日あっても、一日もお広前さしつかえなし。二十七年このかたのこと。茶と水と湯。水食べ。水腹一時。水、薬にしてやる。なにを食べいでも、一心願ひ、治る」とお知らせ。

25日(7/29) 具合よくなり、「仰せどおり治りてみれば、ありがたしこと」と書き記す。

7月21日(8/23) 普段通りの食事に。

8月10日(9/10) 御飯は小一膳、油揚げや魚は食べられず。以後、食べない時もあり。

20日(9/20) 夕飯から「お止めになり」。水を飲んだ。

21日(9/21) 御飯・茶を摂らず、菓子・水だけ。この日、「人民のため、大願の氏子助けるため、身代わりに神がさする、金光大神ひれいのため」  
のお知らせ。

〈参考〉伝承では

休まれてよりは、おかゆの湯、おかずは百合根を煮て玉子つり(卵とじか)して上げたり。(藤井くら伝「〈資料〉金光大神事蹟集」771・紀要第29号)

27日(9/27) 広前から退く

廿九日の夜範雄が御夢に拝して、金照明神様と三十日御見舞に参詣の折、山神様の御咄に、「廿七日夕の御祈念の時に『金光大神永々道を説きたり。菘雄手代りつとめよ。』

との御神命があつて其の夜より御引けになった。」と拝承した。（佐藤範雄伝『金光大神事蹟集』1041）

- ・食が進むようにと、親を思う子としての心情。それを受ける金光大神の心情。
- ・茶・水・砂糖水が飲めないのに、御飯半膳や餅・まんじゅうが食べられる不思議—金光大神が百日修行を終えて旧暦九月十日に神上がりするために、金光大神の肉体を神が操作していると解釈して、「神様の食餌箋」と命名（竹内長次『『お知らせ事覚帳』に拝する教祖様の百日修行について』、金光教東京ペンクラブ）

## 二、「身代わり」をめぐって

### 1 「お知らせ事覚帳」最後のお知らせ

人民のため、大願の氏子助けるため、身代わりに神がさする、金光大神ひれいのため。  
（明治16年旧8月21日、覚帳27—15—2）

#### \* 解釈上「神の身代わり」「氏子の身代わり」の両説

- ・肉体をもつての生を終え「神の身代わり」となって、永遠に働き続けるという解釈
- ・氏子になり代わって礼・詫び・願いをし、神になり代わって教えをするということをし通した生涯の完成として、「氏子の身代わり」の死を迎えたというもの

#### \* 「身代わり」解釈の変遷

「覚帳」解読当初は言葉から普通に受け取る代受苦的解釈だったが、しだいに「やすらかに世を去った」（旧教祖伝記『金光大神』）と考えられていた金光大神の死のイメージと齟齬し、キリスト教的な贖罪を連想させることから、違和感を示す見解が。

## 2 苦難の意味と物語

### \* 物語の意義

背負うには過酷すぎる現実と対面した時、人がしばしばそれを物語化することに気づいたのは最近だ。現実逃避とは正反対の方向、むしろ現実の奥深くに身体を沈めるための手段として、物語は存在する。…この世は何と多くの、底知れぬ物語にあふれているのだろう。（小川洋子「物語はそこにある」『深き心の底より』）

物語：科学的な因果関係の説明とは別の仕方で、人間が経験する出来事や人生や、また人類の歴史を人間的に意味づけるもの

#### \* 「身代わり」が呼び覚まされる場面

- ・水俣病の子供を抱える母が漏らした言葉

この子が私の食べた水銀を全部おなかの中で吸い取ってくれた。そのために後から生ま

れた子供五人は、みな健康であったし、私も何とかやっている。つまり智子は、私たち一家の身代りになってくれたのである。だから我が家の宝である。（原田正純「水俣からのちを考える」第十五回世界連邦岡山県宗教者大会記念講演記録、『金光教報』平成7年2月号付録）

・旅先で溺死寸前に助けられ、医師から絶望と宣告されたが不意に意識を取り戻した。その時の時計の時刻が記憶に残っていたが、同時刻に故郷の岡山で彼を可愛がってくれた祖母が息を引き取っていたことを後で知った。その不思議は、祖母が自分の身代わりになってくれたとしか思えないという。（柴田錬三郎『地べたから物申す』新潮社、1976年）

・詩人新井満が幼い頃、父が病気で入院し、回復して明日退院という日、看護婦による注射の直後に急死し、一家は窮乏状態に。母の苦労を父の早死にのせいと恨んでいたが、ある老師に思いを告白すると、「お父さんは、早死にしたその分のいのちを、息子のあなたにプレゼントしてくれたのかもかもしれません」「[…] 不慮の災難で生涯を閉じなければならなくなった時、お父さんは必死の思いで考えたに違いない。自分の余命を誰かに譲ろう。具体的には、生まれたばかりの息子のあなたに贈ろう […] 」と聞かされて、思いが変わり涙した。（新井満『死んだら星に生まれかわる』河出書房新社）

・終戦直後の満州で、国民党が支配する長春市内と、これを包囲する共産党人民解放軍との間に、鉄条網で蔽われた「チャーズ」と呼ばれる中間地帯があり、どちらにも入れて貰えず、餓死者が多く出た。その惨状を子供時代に経験した遠藤誉『?子』（読売新聞社、1984年）の中で、父である大久保卓次という金光教信奉者が、遺体の山に向かって「祖先賛詞」を挙げて祈念する場面がある。

ようやく私には、大久保さんの「祈り」にこめられていたものが、かすかに見えてくる気がした。かれは、自分を助けるためには文字通りひとをも喰わずにはおれぬ、餓鬼道に陥った人間どものためにこそ、その祈りを捧げてくれていたのではなかったか。われわれが、万死に値する罪を背負いながら、なお、こうして生きることを許されているのは、自らの生死を忘れて、人知れず捧げられてきた、このような誰かの祈り、誰かの涙のおかげだったのではないのかと。（小沢浩『生き神の思想史』岩波書店、1988年、188頁）

### 3 金光教信奉者の体験から

#### \* 子供の死

明治43年、桂松平が重病となった際、子息光行(5歳)が急死。金光撰胤から「桂躬代光行若子之霊神」の諡号、佐藤範雄から「稚子が親に代わりてゆきにけり まことの道をたどりて」「このみたままつれ親たちわがたまと 拝めおやたち神とおもひて」の歌を贈られた。（『桂松平師伝』金光教小倉教会）

#### \*戦災の中で

昭和 20 年 5 月、空襲で大火傷を負った新宿教会長夫人岸井よ志の言葉（岸井勇雄「母を想う」『信ひとすじ 初代教会長二十年祭 初代教会長夫人五十年祭 記念誌』金光教新宿教会）

\*「覚帳」最後のお知らせの秘奥を体得したいと願っていた教師竹内長次の死を受けて、後輩教師が

「その秘奥を明らかにさせて下さい」と願っておられた竹内先生は、今こそわが身の焼きつける大修行の中に、教祖様が多くの氏子の身になり代わって祈られたご苦労とご神意を、烈々たる不動明王の如く感得されてゆかれたことであろう。そう拝察申し上げずにはおられない。（『『お知らせ事覚帳』に拝する教祖様の百日修行について』の、畑愷による「あとがき」）

\*震災体験から—平成 7 年阪神淡路大震災で全壊した六甲教会の教会長・信徒の思い

- ・ある信徒「教会が身代わりになってくださった」
- ・教会長も、地震の翌月に亡くなった親教会長を「身代わり」と感じ、「悲しみも苦しみも何もかも、持って行って下さった」思い
- ・教会の借地問題をめぐって「神様ご自身、力のない私をいとおしみながら、辛い思いで、自らお倒れになった、と思えた。神様は、建物を身代わりにして、私の生きていくおかげの道を開いて下された」→「神様が自らお倒れになられたという思いがしました。「人の手にはかからないぞ」という神様のご意志のようなものを感じ、背筋が寒くなりました。いじけがちであった気持ちを神様に叱られた気がしました」（沢田重信「おかげの中で」『しんえん』1995 年 4 月号）「おかげの中で(2)—身代わり」『しんえん』1995 年 5 月号、「おかげの中で(3)—お繰り合わせ」『しんえん』1995 年 6 月号、「ご挨拶」『しんえん』1995 年 11 月号から）

#### 4 『金光教教典』から

①「世話方川手保平殿まいり、私へすすめられ。私、あなたのお身代わりに立ちてあげます、ご心配かけ申さずと申しくだされ候」（覚書 21—6—11）

②「八月二日、一つ、金光桜丸、父三十三歳厄晴れ、父の身代わりに立ち」（覚帳 25—23—1）

③「余、この時、身代わりに立って病人を助けてやらねば、世間への面目がないと思いつめて、教祖に願立てしに教えたまう」（理解 I 類佐藤範雄 7—2）

④「当てにならないから信心しないとわれれば、それまでのものであるが、まあ、物

の道理から考えてみるがよい。あなたの家にとって、あなたの代わりになる人といえはむずかしいが、あなたの家内になる人は、だれでももらうことができる。まあ、不幸中の幸いと思い、あなたの身代わりに家内が立たれたと思ってはどうか」（理解Ⅱ類吉原良三3—7）

⑤「ご信心しておるのに死んだりすると、おかげがなかったと言うて、信心をやめる者があるが、信心しても死ぬる者は、うちの者の身代わりになっておることがあるから、後々の者がご信心して達者で繁盛せぬと、せつかくの身代わりになった者を犬死にをさせたことになり、なお不幸せが続くことがあるぞ。うちの者が難に負けぬご信心をすることが第一ぞ」（理解Ⅲ類尋求教語録36）

## 5 天地の中の死生

### \* 山川海、天地のこと

一つ、地の狂い、またまた世の狂い。山川海、天地のこと。金光大神へ知らせおき。（明治13年旧10月23日、覚帳24—20—3）

〈参考〉地震いり。天地乃神気ざわり、お知らせ、世の狂い相成り候。（覚帳16—3）

- ・「里はもとより、山川海、日月様の照らしたまうほどの所は」（理解Ⅲ類御道案内3—2）
- ・「山にも種々の物ができ、川にもいろいろの魚がおる。海にも種々の魚がおる。これを漁師が取りて商人が売買し、何人にてても、好きな物を買ひ求めて食ひ、体を丈夫にして国のために働くように天地の神様がお守りくださされてある。何でも世の中の実物に当たって考えれば、しだいにありがたいことがわかる。」（理解Ⅰ類山本定次郎5—1）
- ・故郷の原風景—（高野辰之作詞「故郷（ふるさと）」）
- ・命を支える水の循環—（高野喜久男作詞合唱組曲「水のいのち」）

### \* 天地の莊嚴

天は昔から死んだことなし、地が昔から死んだことなし。日月、相変わらず。（理解Ⅰ類市村光五郎25—3、市村光五郎の初参拝は明治15年）

「狂い」を抱えながらも生きる地の「心」。「地」の心と金光大神の心。

〈参考〉石牟礼道子「命の花火」

荘厳な茜の色に縁どられた黒雲を貫いて、天の柱のような陽の光が、まっすぐ太く、不知火海の上にさしているのを見ることがある。季節や時間によって光の色も海の色も、向こうの島影もちがって見えるが、神々しさには変わりはない。生命という生命は、今あの光の下の海で、たしかに受胎しつつあるのだと、見るたびにおもう。そして、海の中に連鎖して爆ぜる命たちの花火を、うつつに見ているような気持ちになる。（『石牟礼道子全集 不知火 第15巻』藤原書店）

一つ、おどろきありても信心する者には心配なし。夏ばかりとは言わんぞ。寒でも不意病はあるぞ。天地の間のおかげを知った者なし。おいおい三千世界、日天四の照らす下、万国まで残りなく金光大神でき、おかげ知らせいたしてやる。（明治15年旧10月14日、覚帳26—22）

「信心はせんでも、おかげはやってある」（理解Ⅰ類市村光五郎2—1）

人間として、ただ一人、真っ先に知らされた金光大神

→2001年9・11テロの時、アメリカの金光教教師が、真っ先にしたお詫びの祈念「神様、人間がこのようなことをしでかしてしまいました」

#### \*星を拝む

二十八日夜八つに起きて星様拝み。総方、星光り輝く、日本晴れにて。また二十九日夜起きて見、総曇りになり。大晦日五つ時より雪降りだし、日中に五寸も積み。（明治15年旧12月28日、覚帳26—27）

- ・近代化される前の生活にとって、時間空間を計る尺度
- ・日月星によって象徴される大宇宙と小宇宙としての人間の相互連関を認める宗教的世界観、運命を支配する北斗七星という信仰

#### \*生涯の意義

- ・生存・生活・生涯（上田閑照『人間の生涯ということ』、人文書院）

- ・「立教神伝」以後の、氏子になり代わり神になり代わる「取次」に奉仕

〈参考〉金光キクヨ発佐藤博敏宛書簡

博敏が床についておりますから、そして遠方におりますから、私が博敏の代わりにご神前や奥城に代参させていただいております。『どうぞ、お聞き届けをお願い申し上げます』とお願い申し上げます。そして、私は、自分の胸へお神酒を頂き、『どうぞ、博敏のここが悪うございますから、おかげを頂かせてくださいませ』とお願い申し上げます。その時には、すっかり自分が博敏になったような気がします。ああ、ありがた



い、ありがたいではありませんか。向こう倍力、元気な心で井戸替えさせていただこうではありませんかどうぞ、みかげを頂いてくださいませ。（佐藤毅正「私のところを揺り動かすもの」『金光大神の信心を求め現す 教会長信行会記録』、2004年）

- ・「差し向けられた」救済者の使命感と、神からの感謝・ねぎらい  
『ようもようもこう言ふ事が出来ましたのう。』今朝からも、何度も何度も日天四、月天四がそう仰しゃる。『よう、これ迄勤めてくれたのう』と仰りますのじゃ。」とて、ほろほろ涙を落とし給へり。（高橋富枝伝『研究資料 金光大神事蹟集』663）
- ・「生き通しの生神金光大神」という「死んでも死なない」信仰の姿と、死を死として受けとめる信仰の姿

\* 帰幽の日

- ・新暦と旧暦とで九日十日が重なる日—天地の動きに感応し、これと重なるように
- ・生前から定められていた金光大神の縁日であり、旧暦九月は年に一度の祭り日
- ・神の定めた日に死去するという厳粛な出来事に対する畏敬を催させるもの—「金光のご縁日は天地金乃神様お定めくださりたる九日十日なり。金光が手盛りに変えることはできぬぞ」と聞かされていた市村光五郎が、金光大神の帰幽後に漏らした、「生き間のお言葉と九日十日の神去りの時と、考えみるに恐れあり」（理解Ⅰ 類市村光五郎 34）

\* 天地の荘厳なることと金光大神の帰幽

終わりに